2002-07

札響くらぶ

第21号

発行／札響くらぶ
（財）札幌交響楽団内
札幌市中央区中島公園1番15号
（札幌コンサートホール内）
電　話 011-520-1771
ＦＡＸ 011-520-1772

２００２年度総会開催

新会長に上田文雄氏

2002年度の札響くらぶ総会が、去る５月29日午後５時15分から開催されました。例年、キタラ２階の大会議室で行ってきましたが、今年は教育文化会館改修工事にともない、教育文化会館の事務室が大会議室を臨時の事務室として使用しているため、場所を初めて豊平館に移しての開催でした。

議長に竹津宜男さんを選出して議事が始まり、例年通り、前年度の事業・決算・監査の承認に関する件と、今年度の事業・予算の承認に関する件が審議され、両議案共に事務局提案の通り承認されました。

新会長上田文雄氏

今年度の事業計画としては、例年通り会報の発行、練習見学会の開催などが提案されましたが、交流会については楽員の皆さんの意向を調査し、その実施形態などを検討することになりました。また、第５回札響くらぶコンサートを来年４月26日（土）に開催することとし、その実施に向けての準備をすることになりました。これについては、その後、指揮者に今絶大な人気を誇る西本智実さんをお招きすることになりました。ご期待いただきたいと思います。なお、２・３ページの西本さんへのインタビューでもこの点にふれておりますので、是非お読み下さい。

その他の事業計画としては、演奏会数拡大の方法論や入場者数拡大の方法論について、市民的感覚で札響に積極的に提言を行うこと、行政等への提言・要請活動を活発に行なうこと、そして、道外オーケストラの支援市民組織との経験交流などが提案されて、いずれも了承されました。

また、今年は２年に一度の役員改選の年に当たっており、３月末日をもって会長を辞したいとの山科俊郎前会長のご意向を受け、会則に則って会長及び会計監査の選出を行ないました。その結果、会長には事務局長の上田文雄さん、会計監査には細川馨さんと佐藤慶一さんが全会一致で新たに選出されました。

これを受け、会長指名と定められている事務局長には新たに西川吉武さんが指名されました。

挨拶に立った上田新会長は「札響くらぶの更なる発展に尽力したい。また、現在のところ会則に定めはないが、今までも何かとくらぶのためにアドヴァイスをいただいてきた竹津宜男さんに、会則を改正して、是非顧問に就任していただきたいと思っています」と述べられました。

今後、この新体制で、スタッフ会議を中心に会の運営が図られますが、最初のスタッフ会議は７月３日に開催される予定です。会員の皆様の中で、スタッフとして活動してみたいとお思いの方は、いつでも門戸を開いておりますので、積極的にご参加下さい。

総会終了後、参加者のほとんどは、当日開催の名曲シリーズを聴きにキタラに向かいました。山本直純氏の指揮で、「男はつらいよ」などを堪能しましたが、山本さんの最後のステージになってしまいました。心からご冥福をお祈りしたいと思います。

札響くらぶは札響を愛するファンの札響応援団です

指揮者に聞く

先月16日の札響滝川公演のために来道された西本さんに、前日の練習終了後に札幌パークホテルでお話を伺いました。

将来住んでみたい と思うほど北海道が好き!!

西本 智実（にしもと ともみ）さん

ロシア・ボリショイ交響楽団 首席指揮者

西本智実さんのプロフィール

大阪生まれ。1994年大阪音楽大学作曲科を卒業後、ロシア国立サンクトペテルブルク音楽院指揮科へ留学。同時にキーロフ・マリインスキー劇場指揮研修生として研鑽を積む。98年に京都市交響楽団を指揮し、チャイコフスキーの交響曲第6番「悲愴」で日本デビューを飾る。ステージを共にした師イリヤ・ムーシンから「サンクトペテルブルクの伝統を引き継いだ」と最大級の賛辞を受けた。99年名門サンクトペテルブルク・フィル（旧レニングラード・フィル）を指揮し、「卓越した技術と芸術性」と絶賛され、聖スタニスラフ勲章を与えられる。これまで、東京都響、日本フィルなど首都圏の主要オーケストラ、大阪フィルをはじめとした関西のすべてのオーケストラの指揮台に立っている。今年1月よりロシアボリショイ交響楽団の首席指揮者に就任。98年大阪府芸術劇場奨励新人認定。99年第9回出光音楽賞、2000年大阪市「咲くやこの花賞」を受賞。

―― まずは、音楽との出会いについてお聞かせ下さい。

西本 私の母は声楽が専門でしたが、私が生まれる頃には自宅でピアノを教えていました。私は母の胎内にいる頃から、ずっと音楽の中にいまして、クラシックとか歌謡曲とかのジャンルにとらわれず、自分の生活の中に常に音楽があるのは当たり前という感じでした。

―― なぜ指揮者にと思ったのですか。

西本 小さい時から母に連れられてよくコンサートに行っていました。小学校1年生の頃、その日聴いた曲を、家に帰ってからレコードで聴いてみると、同じオケで同じ曲なのに違うのですね。どうしてなのか不思議で、母に尋ねると「指揮者が違うからじゃない」と言われたことが強く心に残り、その後、コンサートでは様々な指揮者に興味を持つようになりました。

小学校3年生の頃に、家にあったスコアを見まして、3歳の頃からピアノやバレエを習っていたのですが、2段で書かれた楽譜しか見たことが無く、とても驚きました。その時に、指揮者はこんな楽譜を読んでいるんだと感嘆し、私の中で、そんな楽譜を作る作曲家はすごいと思い、作曲を学び、そして指揮の勉強をするという、一種の方程式みたいなものが出来てしまったのです。

―― プレイヤーとは違い、男性社会と思われている指揮者の世界に抵抗はありませんでしたか。

西本 実際に指揮者としてデビューしてからは、若干そういう抵抗感を感じたことはありますが、何せ子どもの頃から思い込んでいたことなので、そんなことは考えませんでした。

―― サンクト・ペテルブルクに留学されましたが、なぜロシアだったのですか。

西本 子どもの頃からロシア人演奏家が好きだったということもあります。

特に、ペテルブルクは帝政ロシアの首都として、ヨーロッパ中の文化の良いところを寄せ集めた都市で、それがソ連時代の鉄のカーテンで守られてきたところですから、そういうものにぜひ触れてみたかったのです。私の中では逆に、どうしてロシアに行かないの、という気持ちがあります。

―― 期待通りでしたか。

西本　はい。様々なシステムが、あまりにも非合理的と感じられることもありましたが、実はそれが大切なものを守っていたのだと気づかされました。

——　その経歴から、西本さんというとロシア音楽というレッテルがあるようですが。

西本　私は作曲を学んだ人間ですから、当然ドイツ音楽が私の基盤になっています。「西本＝ロシア音楽」というレッテルは特に気にしません。

——　今、重点的に考えている作曲家はありますか。

西本　バッハとベートーヴェンです。ベートーヴェンの音楽は建物の基礎や柱のようなものですし、バッハの音楽からは「宇宙観」のようなものを感じます。二人とも天才ですし、すぐれた職人芸という感じで、ピアノで弾いてみても、自分で一音を出すのも怖いくらいに完璧な音楽だと思います。

——　指揮者として、将来への夢はありますか。

西本　指揮者を長く続けるかどうかわかりませんし、１回でも自分で満足のいくステージだったと思うことがあったら、すぐやめてしまうかもしれません。でも、こんなことは考えています。私は、ロシアでも他のヨーロッパの国でも、常に外国人、東洋人と見られています。実際、ロシアでも、情勢不安の時には、ステージに出る前に「何かあったら、すぐ袖に逃げてきていいから」と言われたことがあります。また、世界中の劇場によっては、人種によってその入場を制限しているところもあります。私が、そういう人種的な壁を乗り越えることに、少しでも貢献出来るならと思っています。また、子どもの頃の感動が忘れられずに今の私があります。私をみて、もし誰かが「自分も音楽を志したい」と思ってくれる人が出てくれれば、これ以上の喜びはありません。

——　ところで、大阪生まれの大阪育ちだそうですが、北海道はいかがですか。

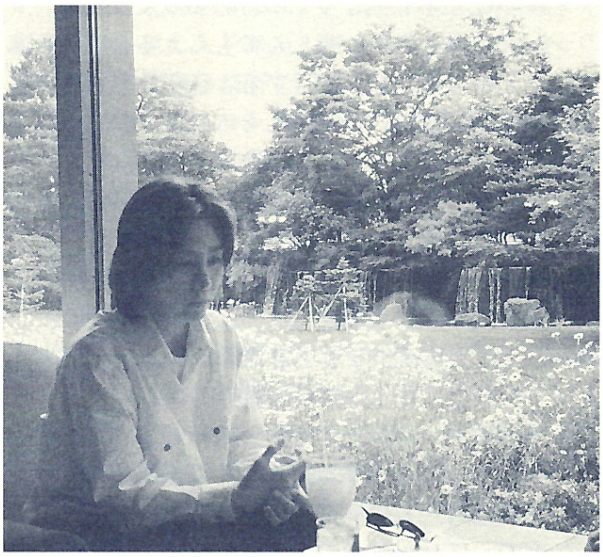
西本　今年２月の名曲シリーズで初めて来ましたが、なにせ、雪が好きでロシアに行った人間ですから、空港で触れたあの張りつめた空気が好きでたまりません。空が広くて、将来北海道に住みたいと、私の内面で計画しているような感じすらあります。

——　札響とは２回目ですが、札響の印象はいかがですか。

西本　２月の時は直前までロシアにいて、すぐ札響でした。本当にいいオーケストラだと思いました。のびのびしていて、スケールの大きさを感じます。コンサート・ミストレスの菅野さんは素晴らしい音楽家だと実感しています。

——　札幌コンサートホール・キタラはいかがですか。

西本　このホールは、外国でもとても有名ですよね。２月の時は、自分で振りながらびっくりしました。指揮者というのは、言わば、空間をしぼったり広げたりするようなことをしているのですが、それが気持ちよく出来るホールですね。国内のホールとしては、私はキタラと京都コンサートホールが好きです。



——　来年の「札響くらぶコンサート」には西本さんの出演をお願いしていますが、意気込みをお聞かせ下さい。

西本　とても楽しみにしております。札響くらぶの皆様のご希望のプログラムで、楽しいコンサートにできればと思います。

——　私たち札響くらぶのような、プロのオーケストラのファンクラブについて、どうお思いですか。

西本　指揮者もプレイヤーも、聴衆無くしては成り立たない職業です。長い目でオーケストラのことを考えて下さり、札響の家族のようなお気持ちなのでしょうね。コンサートまで主催するなど、なかなか出来ることではありませんし、大変なことだと思います。札響の存在が「札幌発信世界」となるよう頑張って下さい。

——　ありがとうございました。明日の演奏を楽しみにしております。ますますのご活躍お祈りいたします。

西本　ありがとうございます。

（インタビュアー　佐藤良次）

FAN CLUBの和　名フィルファンクラブ

今回は、名古屋フィルハーモニー交響楽団のファンクラブ「名フィルファンクラブ」を紹介します。出来てまだ1年ちょっとだそうですが、活発に活動されているようです。

名フィルファンクラブのご紹介

はじめまして！　札響くらぶのみなさん、こんにちは。私たちは、名フィルファンクラブです。2001年4月に、名古屋フィルハーモニー交響楽団のファラブとして発足しました。

音楽が好きで、名フィルが大好きで、なんとか名フィルのことをもっと多くの方に知ってもらい、クラシック音楽を気楽に楽しんでもらえるようにとスタートしたこのファンクラブも、今年4月現在で、400名を越える会員の皆様や、その他多くの方々に支えられて、一周年を迎えることができました。

それでは、ここで私たちファンクラブの活動についてほんの少しご紹介させて下さい。

《ファンクラブ活動》

特典　～ファンクラブに入ったらこんなに素晴らしいことが！～

♪1.指揮者や、プレーヤーの方々を囲んでのおしゃべり会「マエストロサロン」に無料参加

指揮者の方の演奏会でのおもしろいエピソードや、プレーヤーの方の楽器の説明会など、話題はいつも豊富で、毎回好評を頂いています。

♪2.会報誌「f（フォルテ）」のお届け

マエストロサロンの報告や、プレーヤーインタビュー、コンサートの感想や音楽鑑賞のポイント紹介などなど盛りだくさんの内容で、皆様に楽しんで頂いています。

♪3.「名フィル演奏会試聴優待券」のプレゼント

通常4,500円のA席がナント2,000円！

♪4.ファンクラブ会員特別優待コンサートのご案内

年に数回、大きなイベントで200人以上、また小さなイベントで50人程度を対象に、会員のために名フィルから音楽のプレゼントをして頂いています。こんな触れ合いが私たちの誇りです。

♪5.ファンクラブ交流イベントへの参加

夏はビール大会、冬はクリスマスパーティーなど、盛りだくさんのイベントを用意して会員同士の交流も深めて頂いています。

♪6.ファンクラブ提携ショップでの各種ご優待

現在、ヤマハやカワイ楽器などのショップと提携しており、会員カードを見せると、グッズや楽器などを10%OFFで購入することができます。

昨年度はファンクラブ主催で、ウィーンフィル首席フルート奏者、ヴォルフガングシュルツ氏を招いて「オルロフスキーの夕べ」と題した、中世の社交界を思い起こさせるような盛大な催し物を行いました。450名を越える参加者にご来場頂き、優雅な夕べを堪能して頂くことができました。

一方で、マエストロサロンは2カ月に1度開催、会報誌は3カ月に1度くらいのペースで発行しており、ようやくいろいろな活動が定着してきたかな、と思っています。更なる会員獲得のためにも、上記の特典に加え、より楽しい企画を考えて頑張っていきたいです。

ともにファンクラブ活動を頑張っている札響くらぶの皆様の、これからのご活躍もお祈りしております。

名古屋フィルハーモニー交響楽団

1966年に結成。71年、音楽総監督に岩城宏之氏、常任指揮者に福村芳一氏を迎える。73年、財団法人となる。74年、音楽総監督に森正氏、常任指揮者に荒谷俊治氏を迎える。81年、音楽総監督兼常任指揮者に外山雄三氏が就任。87年、常任指揮者にモーシェ・アツモン氏が就任。88年、初の海外公演（パリ他）を行ない、好評を博す。90年、第23回東海テレビ文化賞受賞。91年、愛知県芸術文化選奨文化賞受賞。93年、常任指揮者に飯森泰次郎氏が就任。96年、創立30周年を迎え、東京公演をはじめ数々の記念事業を成功させる。97年、創立30周年記念コンサート（サントリーホール）ライブ録音CDが、文化庁1996年度レコード部門芸術作品賞を受賞。2000年、ウィーン・フィルの首席メンバーと合同公演を行う。同年、2回目の海外公演（アジア8カ国）に招聘され好評を博す。現在、音楽監督小林研一郎、首席客演指揮者沼尻竜典、客演指揮者武藤英昭、ポップスオーケストラ・ミュージックディレクターにボブ佐久間の各氏の体制で年間120回の演奏会を行なっている。

札響物語　XXI

海　外　公　演　④

～こぼれ話～

30年近く前の札響初の海外公演は、私が13年間札響の楽団員を務めて事務局へ移ったとたんに出てきた話だったのです。札幌市民から寄せられた寄付がきっかけとなって、突然浮上した話でした。

楽団員の渡航手続きは、旅行代理店に頼めば楽に済むはずだったのですが、代理店に支払う手数料を節約するように、とのお達しで、事務局員一年生の私は不案内な旅行代理業務にいそしむことになり、深夜まで働く日が出発の前日まで続きました。

まずはパスポートの準備から。一人一人の写真が必要なので、全員の顔写真を撮ることになりました。オーケストラは演奏曲目によって、出番・下り番があります。ほとんど全員が出演する定期演奏会の本番前に盛装した姿で写真に収まるのがよかろう、となり、出張撮影をお願いして、ステージ練習と本番の間に一人ずつ手際よく済ますことになりました。全員の顔写真をそろえてパスポートの申請手続きに行ったところ、知らぬこととは言え、パスポートの申請写真は制服姿では受け付けられない、と断られ慌てて次の練習日に普段着の写真を撮り直しました。

アメリカへ渡るにはヴィザが必要でした。パスポートは集団で手続きができますが、ヴィザはたとえ目的が観光であっても、手続きは各自が顔を見せて行なうのが基本でした。札響は姉妹都市親善訪問が主たる目的だったので、観光ヴィザでも十分だったのですが、万一相手方の都合で報酬を受け取る場面が発生したら、との配慮から全員に就労ヴィザが発給されました。前例を見ない扱いだったのです。当時、日本人がアメリカでの就労ヴィザを取得するのは至難の業だったのです。

千歳空港は、1972年冬季オリンピックの時に臨時国際空港になりました。この時以来、海外へ直接出入りしたのは札響の海外公演が初めてでした。札響が千歳空港から直接海外へ出入りした裏には、道内関係者の千歳空港を国際空港化する切なる望みも託されていて、そのための実績作りの意味もありました。

まだ国際空港になっていない千歳には、出国の際、必要な手続きをする窓口が無かったのです。経費は札響が負担して、函館の出入国管理事務所から係の人を派遣してもらい、千歳空港臨時出入国管理事務所を開設したのでした。

出国の際には、コレラ等の予防注射が義務付けられていて、予防接種を受けた証明を元に、小樽の検疫事務所で発行する証明書（俗にイエロー・カード）をもらい、この証明書を所持することが必要条件だったのです。

札響楽団員はそれぞれの体調の良い時に、ＨＢＣの南隣にある日本赤十字社北海道支部で予防注射を行ない、小樽の検疫センターでイエロー・カードを受け取っていました。

出発の日は良い天気に恵まれました。札響本体は札幌市役所前に集合してバスで千歳空港に向かいました。

札響のコントラバス奏者藤澤光雄さんはウィーンへ留学中だったので、最初の演奏地ポートランド・オレゴンへはウィーンからまっすぐ入ってもらいました。

一方、東京などからの十数人のエキストラ団員は、決められた集合時間まで各自が空港に集まりました。

臨時出入国管理事務所を通過するために、改めて全員のパスポートとイエロー・カードの確認をしたところ、しつこく念押ししたにも拘らず、イエロー・カードを持たない演奏者が三人もいたのです。

さいわい集合時間が出発便の２時間半前だったため、この三人は小樽まで往復してイエロー・カードを取ってきて、出発時間にかろうじて間に合いました。

小樽まで行った人たちが空港へ時間までに到着した時には、思わず仲間から一斉に拍手と歓声が沸き上がりました。

ともかく全員手続きを終えて、無事機上の人となれたのです。　つづく　　（竹津宜男）

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団　オーボエ副首席奏者

高井（たかい）　明（あきら）さん

高井さんの音楽との出会いとは

今となっては、はっきりしませんが、多分、幼稚園の頃にピアノを習ったことでしょうね。

なぜ　オーボエだったのですか

私は東京生まれで、中学時代に少しブラスバンドを経験しました。その時はクラリネットだったのですが……。それからオーケストラの演奏を聴くようになるうち、オーボエがオーケストラ全体から突き抜けてくる音の魅力を持ち、奏者の感情がにじみ出てくる楽器として、自分にとってとても興味のある存在になってきたのです。

希望通り順調にオーボエを習い始めたのですか

高価な楽器ですから、個人で持つのは大変なのですが、幸い、高校の時に両親が「本気になってやる気なら持たせてやる」と言ってくれたのが私の進路を決めたと思います。

高校卒業後はどうなさったのですか

日本の音大には進学せず、ミュンヘン市立リヒャルト・シュトラウス音楽院に留学しました。とにかく、ドイツ語もよく分からない訳ですから、卒業に5年かかりました。その後、エッセンの国立音楽大学で2年学び、カイザース・ラウンテルンの歌劇場のオーケストラに入団しました。

ずっとドイツで活動する気だったのですか

それはありませんでした。いつかは日本に帰るつもりでした。ただ、ドイツのシンフォニーオーケストラでやってみたいという気はあり、何回かオーディションも受けましたが、毎日違う劇場を回ってオペラなどを上演して夜中に帰るという仕事をしながらでは、なかなかうまくは行きませんでした。

札響入団のいきさつをお聞かせ下さい

ドイツに約10年いて、もう帰ってもいいかという気になって帰国しました。実は、ドイツにいた頃から、音楽仲間と話していると、誰言うともなく、札響や札幌の話になるんですね。皆、何となく憧れがあって、札響でオーデションがあればいいね、というようなことを言っていたのですが、帰国後1か月くらいで本当に札響のオーディションがあり、迷わずに受けました。

思い出に残る演奏と言えば

一つは、入団間もなくの頃、ヤンソンスでショスタコービッチの5番をやりまして、崇高と言っていいほどのシンフォニーオーケストラの醍醐味を経験させられたことです。

もう一つは、私の恩師であるゲルノート・シュマールフスですが、札響にも2回ほど指揮者として来ましたが、彼に習っていた頃に、所属していたミュンヘン・フィルのブラームスの1番を聴いて本当に感激したのを覚えています。指揮はルドルフ・ケンペでした。

プレイヤーとしての夢をお聞かせ下さい

個人的には、有名な曲はより深みのある演奏をめざし、未知の曲にはひとつでも多く出会えたらうれしいです。オケの一員としては、札響が北海道に根を張るオケとして、今まで以上に独自のキャラクターを前面に出して活動できたら素晴らしいと思います。東京から見て「地方」という立場に甘んじることなく、札幌から国内はもとより世界へ直接発信して、札響の音楽に共感を持ってくれる人達の輪をぐんと広げたいですね。

札響くらぶの存在について　どう思われますか

単純に、応援してくれるからうれしい、というより、そういう存在があるということで、強く自分達の組織としての責任を感じます。みなさんにいつまでも期待を持ち続けていただけるように、私達も頑張りたいものです。

（インタビュアー　佐藤良次）

札幌交響楽団　ヴァイオリン奏者

石川（いしかわ） 希峰（きほう） さん

ヴァイオリンとの出会いはいつですか

小学校１年の時です。東京の小学校でしたが、大きな学校で、様々な芸術の教室がありました。父が音楽好きで、自分も教会のオルガンを弾いたりしたこともありましたので、音楽を勧められました。たまたま、音楽はヴァイオリンしかなかったので、ヴァイオリンを習い始めましたが、先生が親に、見込みがあるので専門家の指導を受けた方がよいと勧めてくれ、小野アンナ先生に習うことになりました。

ずっと小野先生に習ったのですか

いえ、私の父は国民党政府時代の国費留学生として、当時の東北帝大や東京教育大で学び、研究室におりましたが、中華人民共和国成立後、新政府から新しい国造りに協力するよう要請を受け、私が10歳の時、家族と共に帰国することになりました。

帰国後、半年あまり北京でホテル暮らしをしましたが、私がヴァイオリンを練習しているのを聴いた人が、国立中央音楽学院受験を勧めてくれ、10歳で特別生として入学しました。中央音楽学院では馬院長から直接指導を受けることになりましたが、他にロシアやハンガリーの先生にも習いました。

文化大革命の時代は大変だったのではありませんか

父も私もいろいろつらい体験をしました。中央音楽学院は首席で卒業しましたが、学生は全員地方での労働に従事しなければなりませんでした。私の場合、幸いに、当時の文部大臣と北京市長から直々に手紙をもらい、北京に戻って、中央歌劇舞劇院のコンサートマスターになりました。

日本に戻ったきっかけは何でしょう

1980年に団伊玖磨先生が指揮をされて、先生のオペラ「夕鶴」を約半年間中国各地で公演しました。その時、歌手は日本から来ましたが、オケは中央歌劇舞劇院のオケで、私はコンマス兼通訳を務めまして、先生から「東京に来るなら紹介する」と勧められました。生まれた国ですから帰りたかったのですが、東京には行く気になれず、結局、生まれ故郷の仙台に近い山形交響楽団にコンサートマスターとして入団しました。山響には３年お世話になり、その後、シンガポール交響楽団に移りました。

札響入団のいきさつをお聞かせ下さい

シンガポールには４年いたのですが、妻が気候になじめず、日本に帰国して札幌に住みたいと思いました。団先生に電話すると、すぐにシンガポールに来て相談にのってくれました。それまで、私はすべて推薦で入団していましたので、札響もそのつもりで帰国準備をしていたら、出発前日に突然コンマスのオーディションをという連絡がありました。驚きましたが、準備も何も出来ないままに受け、結果として、トッティでの入団ということになりました。

中国に学校を寄付　という記事を読んだことがありますが

1900年代の後半に、中国では「希望工程」という「貧しい子や辺地の子を援助する」運動が行われました。私も何らかの形で協力したいと思い、札幌市の日中友好関係の友人達の協力も得て、市民会館でチャリティーコンサートを行い、約300万円を札幌の中国総領事館を通じて、中国外務省に寄付しました。１年後に、そのお金で雲南省金平県金平村に小学校が出来た、という礼状と写真が送られてきました。それが道新で報道されたのです。

将来の計画や夢はありますか

今は札響の仕事で精一杯の生活ですが、時間的な余裕ができたら、キタラや中国でリサイタルをやりたいと思っています。中国からは、中央音楽学院の元院長や先生、友人等から、既にそういう誘いもいただいています。何とか実現したいと思います。

最後に札響くらぶについてのご感想を

オーケストラは何十年も研鑽を積んだプロの集団で、おいそれと出来るものではありません。札響は道・市民の宝だと思います。それを理解してくれる札響くらぶには敬意を表したいと思います。

（インタビュアー　佐藤良次）

FAN NETWORK

札幌交響楽団の皆様へ

本日の第４回札響くらぶコンサート、とても楽しくそしてまた今回の演奏にも感動させて頂き、その残響が響いたまま中島公園を歩いて、きれいな夜桜とお月様を眺めながら帰ることができて何とも言えぬ幸せを感じることができました。

昨年の第３回コンサートで、僕は指揮者にチャレンジのコーナーで指揮をさせて頂きました。あんなに大きなホールの、しかもオーケストラの指揮をしてみるという大胆な行動に自分でも驚きました。

僕は、北海道有朋高等学校普通科通信制課程４年に在学中の25歳の男性です。昨年春にいまの高校へ編入しました。理由はいろいろですが、一番の動機は、高校生活をやり直したいという強い信念です。

今日の演奏について触れさせてもらいます。

とっても楽しいコンサートでした。指揮者にチャレンジのコーナーでは、今年もやってみたいと思いましたが、子どもが手を上げていたので遠慮しました。遠慮して正解だったようです。あんなに笑えたコンサートは、今までで初めてだと思います。

「カルメン」は聴き慣れていた曲で、生での演奏はとてもよかったです。ハープとフルートの美しい音色が心に響き渡りました。

ベートーヴェンの交響曲に関しては、個人的にあまり聴かないので正直なところ、第６番「田園」を全楽章聴くのは、記憶している限りでは今回が初めてのことと思います。聴かず嫌いだったのでしょうか。初めてキタラホールで眠ってしまいそうになりました。つまらなかったのではなく、それだけ心が癒された感じがしたのです。独特な安らぎの感じる曲だなあと思いました。

指揮者の飯森範親さんのお話もよかった。途中で演奏できる体制になっているのに、タクトを振らなかったシーンがあってよく観察していたら、途中から入ってこられた方が席に着くのを見届けていて、その聴衆への心配りには感心致しました。

僕はよくコンサートに行きます。どうして、こんなに音楽にこだわり、よくコンサートに行くかというと、自分の感受性を貧しくしたくないからです。感動の少ない人生なんてつまらない気がします。しかも、その感動は与えられるものと限ったことではないと思うからです。幸いにして、30分もあればキタラに行けるような所に住み、札響の演奏も多く聴ける機会に恵まれています。いままでの僕の人生でこんなに音楽というものに感謝し、幸福を感じられたことは他にありません。

音楽を聴いていて、自然と考えることは平和な世の中です。お金と資源を費やして、武器というものも作れますが、楽器という平和を奏でる素晴らしいものも作れます。夢とか幻想にしか捉えられないかもしれませんが、僕は難民や戦争をして何かを勝ち取ろうとする人々に、本当に素晴らしい音楽を是非聴いて欲しいと切なる思いで願っております。

札響の演奏を聴いていて必ずこう思います。この広い世界で札幌に生まれ育って今もここに暮らせて幸せだと。しかし、本当の幸せではありません。それは、この素晴らしい音楽があることを知らない人や、知らないまま死んでしまう子どもがたくさんいるからです。

札幌交響楽団の皆様は僕にとって、かけがえのない演奏家であり、感動という幸せを与えてくれる素晴らしい楽団です。キタラで聴く演奏にどれほど励まされ癒されて、学業にも意欲を燃やすことができたことかと思っています。本当に素晴らしい演奏を聴かせてくださり、心から感謝を申し上げます。これからのますますのご活躍と、その演奏の響きが平和へと結ばれて、多くの人々に幸福が与えられることをお祈りしています。　　（札幌　加藤直徳）

編集後記

久しぶりに「FAN NETWORK」で加藤さんの長文のアンケートの一部を紹介しました。22号以降でも随時アンケートを紹介するつもりです。また、しばらく休んでいる「オーケストラ何でもQ＆A」にご投稿をお待ちいたしております。

西本さんへのインタビューの翌日、滝川まで聴きに行きましたが、札幌からもたくさんの人が行って、会場は立ち見が出る超満員でした。西本さんの人気と、滝川出身の岩崎さんのソロのおかげだと思います。まさに熱気あふれるコンサートでした。なお、西本さんは８月18日と12月23日にも札響に来演されるそうです。

「札響くらぶ」を無駄にせず、読み終ったらお知り合いへ。

次号の「札響くらぶ」は10月発行の予定です。